



総合教育センターだより

BE Connected



センターマスコット センタ君

平成24年9月18日(火)
第42号(通算第125号)
京都府総合教育センター
TEL：075-612-3266



この夏も好評！出前講座

所員が、学校等を訪問し、それぞれのニーズに応じた内容を提供している「出前講座」。

子どもと向き合う時間を大切にできるとともに、職場の活性化につながります。

今年度、これまで出前回数が多い講座

(数字は件数。9月初旬現在の申込数を含んでいます。)

- ・小学校国語科 45
- ・小学校「ことばの力」 21
- ・特別支援教育 25
- ・小学校算数科 18
- ・小学校家庭科 14
- ・中学校道徳 13
- ・教育相談 11
- ・小学校道徳 10
- ・小学校理科 10

他にもこんな講座を用意しています。

- ・中学校授業力向上講座
- ・中学校生徒指導講座
- ・校内研修推進講座

「出前講座」申し込みの詳細な内容は「研修講座の概要」をご覧ください。

お知らせ

平成24年度 小学校「授業づくり」講座Ⅲ (理科、図画工作科、体育科)「最終回」のご案内

小学校「授業づくり」講座Ⅲの日程が確定しましたのでご案内します。

各学校への実施通知後、各教科の講座実施日の2週間前までに、市町(組合)教育委員会にお申し込みください。

体育科	日時	10月23日(火)	10:30~17:00
	会場	亀岡市立詳徳小学校	
理科	日時	11月29日(木)	10:30~17:00
	会場	福知山市立昭和小学校	
図画工作科	日時	11月30日(金)	10:30~17:00
	会場	八幡市立有都小学校	

小学校「授業づくり」講座は、受講者が「児童の本質的な学びを追究する授業づくり」を学び、教科指導力の向上を図るものです。



講座Ⅲでは、実践発表や研究授業を通して参加者が自らの実践を振り返ることができるように構成しています。

講座報告

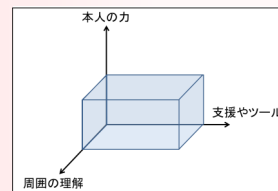


特別支援教育<発展>サテライト 「コミュニケーションの障害」講座

—支援のあり方と具体的方法—

8月23日(木) 京都府立宇治支援学校
京都府スーパーサポートセンター
香川大学 准教授 坂井 聡

コミュニケーションの障害の概念や、障害の度合いを問わず社会的自立を目指すことの重要性などを学びました。特に「本人の力」「支援やツール」「周囲の理解」で構成された3Dモデルによる自立の概念の説明は、非常に理解しやすいものでした。



※ 希望受講者が多数になり、ご迷惑をかけた。

人材育成支援室より お薦めの一冊

臨教審と教育改革

「第5集(第4次答申をめぐって)」

編者：ぎょうせい
出版社：ぎょうせい

臨教審と教育改革

【第5集】
「第4次答申(最終答申)をめぐって」

発行所：ぎょうせい

「臨時教育審議会」答申は、戦後の教育改革の嚆矢(こうし)とされる「四六答申」とともに、すでに教育界では古典の位置を占めている。

広範囲にわたる議論とその提言内容は、巨大な貯蔵庫としての役割を果たし、その後の改革に多様な発想を供給してきた。しかし、現状を顧みるとき、平時の、そして今日の混濁の時代における改革の難しさに思いが至るのである。(N.T)

なお、この書籍は現在、絶版となっています。「臨時教育審議会」答申の概要についての情報は文部科学省のHPから白書・統計・出版物→白書→学制百二十年史→臨時教育審議会と教育改革と進めば閲覧可能です。



生徒指導と特別支援教育



- 児童生徒の理解のために - <その2>

発達障害のある児童生徒の思春期・青年期の課題



小学校高学年から高等学校までの思春期・青年期は、精神的・身体的に大きな変化のある重要な時期です。同世代の一員であることを求める「集団同一性」と、自分は自分であるという「自我同一性」が確立していくからです。

発達障害のある児童生徒の多くは、思春期・青年期に自分と周りの友達との違いに気づき、漠然とした不安を抱くようになります。

理解について



発達障害のある児童生徒は、失敗やつまずきの原因がわからないまま、思春期・青年期を迎え、繰り返される失敗体験で意欲や自信を失い、自己肯定感が低くなっていることも少なくありません。

思春期・青年期における第二次反抗期に問題行動を繰り返す発達障害のある児童生徒に対し、注意や叱責による改善をはかろうとすることは大変難しいということを、理解しておく必要があります。

指導に際しては、表面的な行動だけに着目するのではなく、その背景にある特性に留意するとともに、きっかけになった事象や具体的な行動結果を分析することが重要です。

対応について

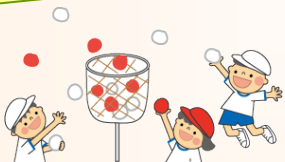
1 落ち着いて学べる環境づくり



学級全体が落ち着いていれば、発達障害のある児童生徒への支援効果が高まります。指導者と児童生徒、また児童生徒間で十分なコミュニケーションが成立し、他者を認め合う学級経営が行われると、他者とともに自己に対する理解を進めることができます。

このような学級は発達障害のある児童生徒だけでなく、誰もが学習しやすい学級といえます。

2 相談できる人や場の確保



思春期・青年期の発達障害のある児童生徒の抱えている悩みや課題について、相談できる人や場が確保されていることが重要です。それには、チームで分担し合って情報共有するための組織的対応が必要です。

しかし、発達障害のある児童生徒は、コミュニケーションの問題から、相談という行為に高いハードルを感じることも少なくありません。したがって、日頃から校内で話しやすい雰囲気をつくっておくことが大変重要です。

3 学年や学校全体で将来展望を支援



思春期・青年期は、将来への見通しをより具体的に持つようになる時期です。発達障害のある児童生徒が足踏みしている場合には、将来の見通しを持つための支援が必要です。

そのためには、個々の指導者が一人に対応するのではなく、学年や学校全体の体制の中で十分話し合い、情報共有を行った上で、将来の見通しが持てるような取組を学校全体で進めることが大切です。